

Title	「美しい鉱山(やま)」：ノヴァーリスと鉱山
Sub Title	„Ein schöner Bergbau" : Novalis und der Bergbau
Author	柴田, 陽弘(Shibata, Takahiro)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1982
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.43, (1982. 12) ,p.277- 297
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	塚越敏教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00430001-0277

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「美しい鉱山」

—ノヴァーリスと鉱山—

柴田陽弘

(一)

ゲオルク・アグリコラの昔から、ドイツ文学には「鉱山文学」とも呼ぶべき系譜がある⁽¹⁾。それは十八世紀から十九世紀初頭にかけて、とりわけロマン派の地平において、ひとときわ光芒を放った。この時代の詩人たちと鉱山との関わりは、後世のわれわれには想像もつかないほど深いものがあるようである。ゲーテが『花崗岩について』とか『地球の形成』などの論文のある鉱山学者であって、『ファウスト』第二部の水成・火成論争など鉱山のモチーフをしばしば取り上げてゐることは周知のとおりである⁽²⁾。ジャン・パウルにおける「鉱山」は、本題からはずれる独特の冗舌のきつかけの一つになっている。ロマン派の「夜」への志向は、必然的に鉱山の「地下」の世界と結びつく。いわばロマン派は鉱山のモチーフの宝庫である。ティークの『ウィリアム・ラヴェル氏の話』をはじめ、ホフマンの『ファールンの鉱山』、ブレンターノの『ゴドヴィ』など枚挙にいとまがない。なかでもノヴァーリス（本名フリードリッヒ・フォン・ハルデンベルク、一七七二—一八〇二）と鉱山との関わりは、他の詩人たちと比較にならぬほど深い。彼の思想世界の基調

は、鉱山との交わりから築き上げられたと言ってもいいほどである。彼はまず職業上の必要から鉱山学を学び始めるのだが、やがてその枠をはるかに越えて、彼の世界観の内実を形づくるまでになる。しかしノヴァーリスと鉱山との関わりは、決して唐突に生じたものではない。父親がハルデンベルク家世襲の領地であるマンスフェルトの鉱山監督局長を永年勤め、ノヴァーリス十二歳の折りには、ザクセン選帝侯領内の製塩所長に転じている。いわばノヴァーリスは鉱山の中で育ったようなものである。のちに鉱山を生涯の仕事場とする下地は、すでにこの頃からできていたと言えよう。このように初期ロマン派を代表する「青い花」の詩人は、幼い頃から粉塵にまみれた漆黒の坑道と深くつながっている。しかも鉱山に生活の確固たる基盤を求めたたたかな職業人でもあった。その短い生涯の最後の三年余だけを取り上げて、哲学と自然科学への緊迫した集中と、詩作品の充実と、職業上の栄達への努力とに彩られている。そしてそのいづれの営為とも、「鉱山」は深くつながっているのである。一七九七年の暮に、二十五歳のノヴァーリスはフライベルクの鉱山アカデミーに入学するのだが、それ以降の年譜を簡単にしてみる——

一七九八年、本格的な自然科学研究の開始。『花粉』、『信仰と愛』、『ザイスの学徒たち』、『普遍的草稿』など。

一七九九年、フォン・オッベルの記録係として各地の製塩所を視察。製塩所試補に任命される。『キリスト教世界あるいはヨーロッパ』、『聖歌』、『ハインリッヒ・フォン・オフタディンゲン』など。

一八〇〇年、テューリンゲン郡の郡長を志願。ツァイツ、ゲーラ、ボルナ、ライプツィヒ地方の地質学調査旅行。郡長補に任命される。『夜の讃歌』、『ハインリッヒ・フォン・オフタディンゲン』続稿、『死者たちの歌』など。

ざっと概観しただけでも、鉱山アカデミー入学から一八〇一年三月の死にいたるまでの軌跡は、学問への傾倒と多産的な詩の創造と職業上の累進の意欲とに満ちている。しかも注目すべきは、その名声を詩作品に負うているノヴァーリス

すが、創作を単なる片手間 *Nebensache* とみなしていたことである。⁽³⁾そこでわれわれは、ノヴァーリスの学問と創作と職業の諸相が、「鉱山」とどう関わっているのかをつきにみてみることにしよう。⁽⁴⁾

(11)

ノヴァーリスが職業の対象として鉱山と直接関わったのは、一七九五年十二月三十日にザクセン選帝侯領の製塩所見習を拜命し、翌年二月に勤務を始めてからのことである。その後から、この職業に必要な専門知識の不足を補うため、猛烈に書物を読み始める。勤務に就く直前の一月後半には、製塩に必要な化学の知識を習得するため、ランゲンザルツアのヴィークレープのもとへ赴いている。この人は薬局の主人であったが、『普通化学および応用化学教科書』(一七八一)などの啓蒙化学書を数多く書いて令名が高かった。また当時流布していたシュタールのフローギストン理論の信奉者としても知られていた。⁽⁵⁾ 燃焼する物体には「火の精」と呼ばれるフローギストンが含まれており、その増減によって物体の温度が決まるという説である。熱を一種の物質とみなすこのいわゆる燃素の理論は、空気中の酸素の役割がラヴォワジエによって突きとめられるまで、通説として權威をふるった。フライベルクの化学の教授ラムパーディウスも、この新しい化学の擁護者だったが、不思議なことにラムパーディウスに学んだノヴァーリスは、『信仰と愛あるいは王と王妃』の断章二十一で「過剰な熱素」と言っている。⁽⁶⁾ さて、最初の『ノヴァーリス伝』を著わしたユストはこう報告している。ノヴァーリスは「全課程を修めるのに十日か十二日でこと足りてしまった。それゆえ、まぎれもなくこの道の泰斗であったヴィークレープは、ハルデンベルクの名を口にするときは、尊敬の気持をこめずにはおかなかったのである。」⁽⁷⁾

一七九六年二月から、デュレンベルク、アルテルン、ケーゼンの製塩所での忙しい毎日が始まる。なるほど初めは「なじめない」⁽⁸⁾ 感じのあったここでの仕事にもやがて慣れ、同年の七月には、友人のF・シュレーゲルにこう書き送っている――

「すべてに満足しているよ、まだ時折自分に満足できないけれどもね……父はぼくの勤勉ぶりに満足しているし、ぼくはこの仕事で退屈だなどと苦情を言うことはできないのだ。ぼくはますますすべての中に、驚くべき全体の高貴な分枝を感じている――ぼくが成長して入りこみ、ぼくの自我をいっばいに満たしてくれるはずの全体のね――」⁽⁹⁾

この証言は、ノヴァーリスの精神の成長を知る上で重要である。彼の生涯の課題であり、ドイツ観念論の懸案でもあった「内部」と「外部」との連関、「主体」と「客体」ないし「自我」と「自然」の相互の連関をどう解決するかという問題に、ひとつの光明が見えてきたことを示している。すでにテンシュテットの郡役所に勤務していた一七九五年の秋に、ノヴァーリスはフィヒテと徹底的に取り組んでいた。その成果である膨大な『フィヒテ研究ノート』の断章群の中に、「自我≠非我」「自我は汝」という命題が見い出される。主体と客体の動的連関についてのこの命題は、なるほどフィヒテを越えるものではあったが、あくまで予感ないし直観であって、系統だった論理の筋道から生まれてきたものではなかった。⁽¹⁰⁾ しかし右のノヴァーリスのことばは、この予感が次第にはっきりと形をなしてきており、彼の内部に独自のロマン哲学が育ちつつあることを示しているのである。この時期のノヴァーリスは、アルテルン、ケーゼン、アイスレーベンなどの製塩所を視察して廻る「旅から旅への毎日」⁽¹¹⁾ であつたが、いよいよ深まる地下の抗道との交わりが、その哲学に影響を与えているであろうことは否定できないと思われる。

ノヴァーリスは一七九七年三月に、許嫁だったゾフィー・フォン・キューンを病いで失なうという不幸に見舞われ

る。その死の直後、ユストに宛ててこう書いている――

「神という観念が日ましに親しみのあるものになっていきます」

さらにつづけて――

「学問はますますぼくの興味をかきたてます。というのは、ぼくはより高い目的に従って――より高い立場から学問を研究しているからです。見えない世界を視るという希望をもって、学問とわずかな友と職務の中に、ぼくは最後の息をひきとるまで生きたいと思っています⁽¹²⁾」

不幸を克服しようという闘いの中で、学問と職務に没頭しながら、見えざる「内部」の世界、いわば「神」の領域に近づきつつあるノヴァーリスの精神の躍動が感じられる。この頃の読書には、『マイスター』や『ハムレット』とならんで、フィヒテの『知識学の原理による自然法の基礎』(二七九六)、シェリングの『哲学の原理としての自我について、あるいは人間の知における無制約者について』(一七九五)、『自然哲学論考』(一七九七)などが挙げられる⁽¹³⁾。また一七九七年の十月と十一月には、オランダの哲学者ヘムステルホイスを研究する。これらの哲学者と対決することによって、また深刻な内面の危機の克服を通じて、ノヴァーリスは次第により高次の調和の観念、見えざる内部の世界を感じとっていく。

(三)

一七九七年十月三十一日、ノヴァーリスの父は選帝侯に宛てて、息子のフライベルク鉱山アカデミー入学の許可願いを送る。同年十一月六日、ザクセンの財政を司る枢密財政評議員会の議長ヴァルヴィッツ伯爵が、選帝侯の名において、フライベルクの上級鉱山監督局につきのような命令を送付した。同人のフライベルクでの講義聴講、当地ならびに

オーバーゲビュルクの鉱山および精錬所の鉱坑視察を許可する。同年十一月十五日、上級鉱山監督局はクーア・ザクセンのすべての監督局に宛てて、管轄下の採掘場、碎鉱場、洗鉱場その他の作業場への同人の立ち入りおよび見学を許可する旨発令する。同時に、フライベルク大学教授のヴェルナーとラムパーディウス、および上級鉱山監督局秘書官ケーラーに、講義聴講許可が要請される。⁽¹⁴⁾

おおむね右の経緯で、十二月一日、ノヴァーリスはフライベルクへむかう。フライベルクは一一六八年以来銀山で栄えた鉱山都市であるが、十六世紀後半に全盛をむかえて以後、産出量は下降線をたどる一方だった。とりわけ七年戦争後のザクセンの経済の疲弊は甚しかったから、この重要な財源の「再興」が国家の関心事の一つになった。フライベルクの鉱山アカデミーの設立には、この事情が背景にある。これまでの経験偏重の採掘技術を改良し、学問の裏づけによって鉱山の振興を図ろうとしたのである。ザクセン経済の立て直しのためのいわゆる「再興」がはかばかしい成果をあげたとは言いがたいが、製塩業と鉱山業においてはかなりの成功を収めた。九十年代の初頭には、フライベルク銀山の産出量は増大し、八十年代のザクセン国内の全鉱山の産出量をさえ凌駕するにいたる。⁽¹⁵⁾ いわば十八世紀の歴史的文脈の中では、鉱山業は花形産業であり、鉱山監督官は輿望をになう花形職業であったと言えなくはない。こうして、一七六五年に世界最初の工科大学として創立されたフライベルク鉱山アカデミーには、世界中から俊秀が集まった。『卒業生名簿』⁽¹⁶⁾には、日本をはじめとして、ヨーロッパのみならず、南アメリカからの学生の名も見える。ノヴァーリスの入学した頃は、わずか五、六十人の学生を擁するに過ぎぬ小大学だったが、秀れた教授陣によって、学問研究と教育の拠点になっていた。ノヴァーリスは、創立以来四九三人目の学生として登録された。彼はここに、一七九七年十二月から一七九九年の復活祭まで在学したが、その間にどのような講義を聞いたのだろうか。当時は学期^{ゼムスター}という区分はなかつ

たから、まずここでは、一七九七年の復活祭から翌年の復活祭までの講義録を見てみよう。ノヴァーリスは途中から参加したことになる。

(1) A・G・ヴェルナー

「一般鉱山学」「フライベルク鉱区の知識とそれを得る法」「鉱物分類学」「地球観相学」「鉄冶金学」

(2) J・F・レムペ

「純粋数学」「物理学」「鉱山機械論」「土地測量法」「理論的鉱区測量術」

(3) A・W・ケーラー

「クーア・ザクセン鉱山法」「鉱業文庫」

(4) W・A・ラムパーディウス

「普通冶金学を含む普通化学および分析化学」

このほか、少なくとも週に三日か四日、鉱山監督官による実習があった。翌一七九八年の復活祭から一年間の講義で、ヴェルナーは機械鉱山学、鉱物分類学、地球観相学、鉄冶金学、とくに鉱山百科全書を担当している。レムペは算術、幾何学、平面および立体三角法、実験および理論物理学、応用数学、鉱山機械論を、ラムパーディウスは冶金学を特別に顧慮した普通化学、分析および技術経済化学、普通冶金学を講義した。ケーラーは、病気のため休講だった。⁽¹⁷⁾

フライベルク鉱山アカデミーの最初の教師たちには、数学・工学・物理学・理論鉱山測量学のシャルパンティエ、冶金学のゲレルト、鉱山学・鉱物学のロマー、実践鉱山測量学のリヒター、試金学のクロツチュなど錚錚たる学者たちがいた。ノヴァーリスの入学した頃には、彼らはすでに大学を去るか、死亡していたから、ノヴァーリスは、これら鉱山

諸学の先達たちの後を襲った第二世代の学者たちの警咳に接したことになる。⁽¹⁸⁾

さてアカデミーの学生には二種類あった。ノヴァーリスのような自費学生と、奨学生ならびにサクセン国民たる給費生である。給費生に市民階級の出身者はほとんどおらず、彼らは坑夫の服に身をかため、将来国務につくことを前提に無料で講義を受けた。たいてい二年目から手当ても支給され、自由契約によって坑内で随意に働き収入を得ることもできた。そのかわり勉学と実務とについての日誌をつけ、毎年試験に及第するよう義務づけられていた。たいていの講義は、自費学生に特別講義として与えられた。ノヴァーリスもまた、そのような講義をとったに違いない。彼には、特定の科目をとったり、試験に及第しなければならぬ義務はなかったが、彼が書き遺した広汎な学問の諸分野についての膨大な断草群からも、きわめて勤勉な学生であったことがわかるのである。⁽¹⁹⁾ たとえば『普遍的草稿』Das Allgemeine Bouillon (一七九八—九九) には——「重力論——と普遍算術とをまず調べることにしよう。前者へは一時間、後者へは二時間をあてることにしよう。ついでに思いついたことは、『普遍的草稿』へ書き込むことにする。残りの時間は、一部は長編小説に、一部はさまざまな読書に——そして化学と百科全書学一般に捧げられる。⁽²⁰⁾」しばしば彼がフライベルクの鉱道へ下りて研鑽を積んでいたことは、師のヴェルナーの証言によっても知ることができるし、カロリーネ・シュレーゲルに宛てた手紙で、今は「地下にすることが多く」「地上では骨の折れる研究と取り組んでいる」と報告していることから推測できる。⁽²¹⁾

(四)

一七九八年九月一日付の父親に宛てた手紙で、ノヴァーリスは金の無心をしている。⁽²²⁾ 鉱山アカデミーの教授ラムパー

ディウスとレムベに支払う授業料と、同校のフランス人学生ドービュソンから受けている数学の家庭教師代である。ドービュソンには十二週間分の借金があると報告し、レムベに払う金は捨てるようなものだと言っている。レムベは教育者として失格だと攻撃する一方で、「ヴェルナーとラムバーディウスがこの中ではいいんです。ヴェルナーには大変かわいがられています」と書いています。また後見人のフォン・オッペルには、「ヴェルナーを知ったことで、私の仕事に新しい活力が生まれ、方向が定まりました」と感謝の気持ちを述べている。⁽²⁴⁾ H・シュテッフェンスは、ヴェルナーの人格から発散する光彩を、「これほどの確固たる自己完結の個性に出会ったことがない」と称讃した。⁽²⁵⁾ 偉大な寛容の精神、愛情が深く、学生のひとりひとりを思慮深く取り扱う教育者としての立派さ、感動的な講義などを弟子たちは数え上げている。科学的な分析の精神、鋭い感受性、自然現象への没頭などが、この人物を独得の生彩あるものにしていたようである。⁽²⁶⁾

さてヴェルナーは、一七四九年、十六世紀の初めから六代にわたってヴァイダの鉄精錬所を所有する家系に生まれ、父もまたオーバーオジッツの町ヴェーラウとロツェンドルフの精錬所の監督だった。『ハインリッヒ・フォン・オフトアディング』第五章に、「ラオジッツの生まれで、名はヴェルナーと言った」と描写されている親方は、周知のごとくこのヴェルナーの人格を反映しているとされている。一七六九年にヴェルナーがフライベルク鉱山アカデミーに入学した頃の学界の水準はどうであったか。鉱山諸学は一七〇〇年この方勃興期にあつたが、科学と呼ぶにはまだほど遠いものだった。鉱物学では化学的法則性による分類が始まっていたが、まだ不完全で矛盾しているところが多かった。鉱床学では蓋然性によって個々の事実を一般化する方法をさらに進めて、法則性の発見が徐々に始まっていた。地質学も思弁的空論の域を抜け出て、学問としての基礎を固め始めており、鉱山測量学は数学の応用によって、単なる技術から学

問への道が拓けてきたところだった。鉱山学の分野はいまだに経験的性格を色濃く残していたが、ケルンの著述『鉱山報告』のような知識の体系化が始まっていた。鉱山機械学も、物理学や工学の進歩に合わせて学問となりつつあった。総じて自然法則の認識と応用が、鉱物資源の生産と不即不離であることが確認されるようになった。ヘンケル、ゲレルト、フォン・オッペル、クロンシュテットののような学者たちが、長い間秘密のベールにつつまれてきた鉱山を科学的分析の対象とすることによって、増産に貢献しつづ⁽²⁷⁾あった。しかしいまだに鉱山学などは、揚水機械の説明に終始しているようなところがあったから、若いヴェルナーの知的好奇心はもっぱら、鉱坑へ下り、見聞を詳細にメモすること⁽²⁸⁾で満たされた。やがて、ライプツィヒ大学での研究ののち、一七七四年二十四歳のときに、『化石の外的特徴について』⁽²⁸⁾を出版して、科学界に大反響をまきおこす。これまで不完全で恣意的だった鉱物の記述に、細かい特徴の観察によって、確固たる法則性を賦与したものである。この業績によって、ヴェルナーはフライベルク鉱山アカデミーの教授に招聘される。

『普遍的草稿』に、「ヴェルナーの流儀による、学問体系の取り扱い、しかしもつと普遍的に」とか、「ヴェルナーの体系の検討と私の企ての批判が、いま最初にやらねばならぬ仕事だ」とあるのは、ヴェルナーの体系記述の方法論の批判を指している。⁽²⁹⁾ここで「私の企て」というのは、ノヴァーリス独自の「百科全書学」の構築を意味する。それは恐らく、ヴェルナーの「鉱山百科全書学」の講義や、ヒンデンブルクの「組み合わせ解析学」の研究によって触発されたもの⁽³⁰⁾と思われる。

「八今やわたしは、あらゆる学問を詳細に吟味し——そして百科全書学のための資料を集めようと思う。まず数学的なもの——ついでその他のもの——哲学、道徳などは一番最後に。」⁽³¹⁾

『普遍的草稿』は、この「百科全書学のための資料」として書きしるされたものである。「科学の聖書」⁽³²⁾をめざして書きつけられたこれら断章群の内容は、きわめて多岐にわたる。鉱物学、天文学、心理学、生理学、数学、医学、考古学、政治学、美学、宗教学などから魔術にまで及び、まさに「観念の織機」⁽³³⁾ *Ideenwebstuhl* と呼ばれるにふさわしい。ノヴァーリスのこの企ては、単なる学問の事典風な羅列を意味するものではない。そこに込められた思想は近代的で、学問芸術の境界を取り払って相互に関連づけ、人間の多彩な精神活動の刺激的なせめぎ合いの糸から普遍性を紡ぎ出そうとする企てだった。普遍学の伝統ののっとり、総合学問を打ち樹てようとするこの壮大な構想は、「学問はすべて一つである」⁽³⁴⁾ という確信から生まれている。そしてこの確信を証明する第一歩として、ノヴァーリスはまず、ヴェルナーの鉱物分類学の体系叙述の方法の検討に取りかかるのである。

(五)

ノヴァーリスの『ヴェルナー研究』は、一七八五年版の『化石の外的特徴について』からの抜粋と注釈よりなっている。これと平行して『普遍的草稿』にも、ヴェルナー研究の痕跡をいたるところに見い出すことができる⁽³⁴⁾。

「論理的文献学。客体は、主体と同じくらい、分類原理 *Classificationsprinzip* に役立つ。区分原理 *Einteilungsprinzip* を区分された各部分に従って、逆に *umgekehrt* 分類することができる——そしてその相互の分類とその完全な併合によって、分類の過程が解明され吟味されるのだ。区分の原則 *EinteilungsGrundsatz* と区分されたものとは、相互に利用し合わねばならない」⁽³⁵⁾

ここにはノヴァーリス独特の相対的思考法が働いているが、それはすでに『フィヒテ研究ノート』にも顕著な特徴だ

った。一七九五年以降に書きためられたノヴァーリスの龐大な断章群の中には、「自我と非我」「内部と外部」「有限と無限」「微分と積分」のような対概念が頻頻と出てくる。「自我≠非我——あらゆる学問と芸術の最高の命題」⁽³⁶⁾に端的に表現されているように、ノヴァーリスの対概念は対立する有限者を包みこむ一つの総合を意味している。彼は「総合も分析も同じである——ただひっくり返っているだけ nur umgekehrt」⁽³⁷⁾とも言う。これら対概念が、実は同一事象を逆の視点から眺めているに過ぎないというノヴァーリスの確信は、右の分類学の断章の文脈で言えば、「分類原理」と「分類されたもの」との相互に分類し合う関係に表わされている。

さてヴェルナーはこの「分類原理」を、鉱物の外的および内的特徴にもとめる。(1)外的特徴とは、五感で知覚される特徴の集合であって、形体、結晶、光沢、断口、透明度、条痕、硬度、感触、重さ、臭い、味などを指す。(2)内的特徴は、(a)化学的な、酸・水・火などの処理で間接的にのみ確認できるもの、(b)物理的な特徴で、摩擦による電気、磁気、燐光性など、(c)産出場所(地理的出自)のような経験的特徴の三つに分かれる。

ヴェルナーはさらに上位の特徴と下位の特徴とを区別し、その厳密な定義づけを進めていくのであるが、われわれはここでノヴァーリスの「ヴェルナー批判」を見ることにしよう。ヴェルナーによれば、「動植物界から化石界への変化 Übergang を指摘することはできず」「化石が隕石に、植物が動物に変化することはあっても、いわゆる有機界が無機界に変化することはない」⁽³⁸⁾。ノヴァーリスはこれに対して、「特別な変化の肯定は、二つの世界の変化の否定と同じくらい証明されない」と主張する。また「形体変化 Formveränderungen から混合変化 Mischungsveränderungen が規定され得るか」というヴェルナーの問いによって、「新しいより高度の、両者を包含する学問の批判」が始まると評価しつつ、「彼の答えはきわめて表面的である」と批判する。さらに、形体変化と混合変化との相互作用、すなわち化石

の外的特徴と内的構成要素との相互作用を、a posteriori にのみ確認されるもの、「理論家に論理的満足を与えるだけのもの」とするヴェルナーの見解は、「独断的」であると反駁する。

「彼は両者が等しいとする論拠を完全に与えることが必要であると主張している。(物それ自体など)。彼とは違って、形体変化だけで(方法だけで)混合変化が決まってくると信じている観念論者⁽³⁹⁾は、魔術的な智者 *Wisser*——予言者である」

つづけてノヴァーリスは、ヴェルナーが独断的であるとする理由を二つ挙げる。その一は、「特徴の相対性」*Relativität der Symptome* であり、その二は、「特徴が偶然に依存する傾向」*Mitabhängigkeit der Symptome vom Zufall* であるが、ヴェルナーがこのいずれをも認識していないと言う。ここに「ヴェルナー批判」の焦点があると思われる。ノヴァーリスはすでに述べたように、事象の相対性を重視し、自然における偶然と無秩序を積極的に容認する。この自然認識の相違が、両者の決定的な違いである。外部の変化と内部の変化の相互作用をじっくりと観察するなら、おのずから「真の、確乎たる関係と法則」に到達できるとノヴァーリスは考える。ところがヴェルナーには、化石の混合と変化の実相の把握が足りず、つまるところ、ノヴァーリスの懸案だった「内部」と「外部」の連関の認識が欠けている、と主張されるのである。⁽⁴⁰⁾

(六)

フライベルクでの勉強は、進捗しつつあった肺患にもかかわらず、きわめて実り多いものだった。さらにこの豊饒の地味の上に、製塩所試補から郡長補への昇進、ヴェルナーの委嘱による国内の地質学調査⁽⁴¹⁾などの職業上の努力、詩作品

の充実、世界観の深化というような果実が実るのであるが、ここでは簡略にフライベルク時代の成果についてまとめたい。

そもそも職業上の必要からフライベルクへ赴いたノヴァーリスであったが、はからずも過渡期にあった諸科学の新理論に触発されることになった。ガルヴァニズム、リッターの電気化合理論、ブラウンの刺激理論、化学における燃焼と化合の理論、微積分学や組み合わせ解析、鉱物分類学や鉱物百科全書学がそれである。ノヴァーリスもドイツ観念論の提起した「主体」と「客体」の連関に取り組んだが、おそらく化合理論や微積分学によって、「より高い調和」の領域を一層はつきりと確信するようになったのではないかと思われる。すなわち、本論との関連では、外的特徴と内的特徴とを互に変化し合うもの、化合しあうものとして理解し、全体を「より高い調和」として、ひとつの「総合」として眺めるといふ見方である。「分けられたもの」を究極的に「合一」すること、鉱物学における「分類」と「体系」は、「分析」と「総合」、「部分」と「全体」の相互作用に対応する。そしてこの「合一」のメカニズムには、同一事象を逆の側面から見ているあの相対的思考法が働いているのである。この思考法は、徹底した自然科学研究によっていよいよ深められたものと思われる。『ヴェルナー研究』に端的に表われているように、フライベルクでの自然科学研究は、それに先立つ哲学研究での成果を基礎づけ、検証し、さらに深化させる過程を示しているのである。

ノヴァーリスがどんなに熱心に自然科学研究に、とりわけ鉱山学の研究に取り組んでいたかは、遺されている数多くの断章、師のヴェルナーに宛てた報告書、官吏として書いた業務報告書などに歴然としている。それは同時に、ノヴァーリスの鉱山学の知識がきわめて秀れてはいたが、⁽⁴³⁾十八世紀の学問の水準を越えるものではなかったことも示している。ある断章で「ハひょっとして当地で（フライベルクで）講義をすることができないだろうか⁽⁴⁴⁾」と書いているのも、

ノヴァーリスの自信のほどを伝えていると言えるだろう。

ノヴァーリスの自然科学断章はまた、変革期にあった世紀末の科学の真理と誤謬とを同時に含んでいる。たとえば燃素(フレイクストン熱素)の理論に関連して、「膨脹力は同時に——燃素的で——酸化性があり——陰電氣的である。重力は反燃素的に還元的に作用する。(空氣を生ずる)。」⁽⁴⁵⁾ というように述べているし、また「反燃素主義者は酸素を賢者の石にしている⁽⁴⁶⁾」と皮肉つてもいる。ヴェルナーの水成論についても、同じことが言える。ヴェルナーは一七八五年に、それまで主観的な推測に過ぎなかった地球構造学を根本から組み立て直して、厳密な観察に基づく地球観相学⁽⁴⁷⁾を打ち樹てたが、水成論を提唱して地質学史に名をとどめることになった。火山論者や火成論者との名高い論争のきっかけをつけたからである。ヴェルナーによると、原初の地球は原始の海 Urmeer におおわれており、この海に溶けていた物質がさまざまな結晶して地殻を構成するようになった。まず花崗岩、片麻岩、玄武岩などが結晶し、やがて海面の沈下によって陸地が現われると、これが侵食をうけて堆積し、砂岩や石灰岩のごとき成層岩ができた、というのである。結晶はすべて水溶液からのみできるといふこの説は、やがて玄武岩・花崗岩は火成岩であるとする J・ハットンらによって打ち破られる。ヴェルナーには変成作用の観念がまるで欠けていたのである。しかし、自然と世界の生成に関するこのきわめて夢想的な仮説は、ある意味でロマン派の自然哲学と通い合うものがあるから、ノヴァーリスの資質と共鳴するところがあったに違いない。

「水はいずれにせよおもに地表を造った。」⁽⁴⁸⁾

とか、

「火成作用の産物は蒸留によって水を生じない。一方、水成作用の産物はそれを生じる。」

と書いているし、

「水は液状の炎である」⁽⁵⁰⁾「すべての炎は水から生じたものである」⁽⁵¹⁾とも言っている。これらの断章は、ノヴァーリス独自の Analogie 思考を示しているが、いずれも水成論を裏書きしている。このような燃素論や水成論への言及は、当時の混沌たる科学界の正直な反映とみてよく、かえってノヴァーリスの真摯な勉強の証左となるだろう。

ノヴァーリスがヴェルナーに宛てた手紙は、尊敬と恭謙の念にあふれ、いかにその人格に魅了されているかがわかるのであるが、彼はヴェルナーから水成説や百科全書学などを受け継いだばかりでなく、分類と体系化という学問上の方法論にも影響をうけた。しかもその人格への傾倒とは別に、きわめて醒めた眼で師の『化石の特徴について』を批判的に研究して、自らの哲学研究の成果を深めているのは注目に値するのである。

(七)

ここでは、ノヴァーリスの詩作品に表わされている「鉱山」像を、『ハインリッヒ・フォン・オフタディンゲン』を例に引いて考えてみたい。第一部第五章がその素材を提供してくれる⁽⁵²⁾。この章全体がいわば鉱山業の讃歌といいながら、それはつぎの個所にとくに明瞭に表現されている。

「鉱山業は神さまから祝福をうけるに違いありません。なぜなら、どんな技術でもそれに携わる者を幸福にして気高くし、神さまの叡智と摂理への信仰を呼び覚まして、心の無邪気さと子供らしさを純粋に保つという点で、鉱山業に及ぶものはないのですから……」

ノヴァーリスはまた「鉱山業の気高い技術」とも言っている。明らかにここに言われている「鉱山」は現実とは違う

ものである。作品全体が伝統的なメーメルヘンの体裁をとっていることに注目したい。それは文体とモチーフに表われる。まず文体は簡潔で明晰であり、句読点を多用する並列の複合文が目立つ。文体から立ちのぼってくる印象は、静謐で瞑想的であり、坑夫の特性をそのままに表わしている。モチーフはつねに単純な二元論に支配されている。人間は、「貧しく、敬虔」で、純粋な子供の心をもつ人々と、「欺瞞狡猾」の策略をもち、金銀財宝を求める人々とに分れる。富のモチーフにも二通りある。地上の「商品となった富」と、地下の「神の懐にいだかれた富」とがそれである。総じて、地上では悪が支配し、地下では善が支配している。坑夫にとって、商品にかわった金属など「何の魅力もない」のであり、彼らは「わずかな給料を心からの感謝をもって」受けとり、それで自足している寡欲な人々である。このように地底は善であるというロマン化された象徴のモチーフは、ロマン派の中でも特異であると言える。ホフマンの地下も、テークの地下も、いずれも「魔的なもの」をひそめた場所であるのと対照的である。鉱山監督官であったノヴァーリスは、鉱山の実態をよく心得ていたはずである。A・ベルナーによれば、一七五六年のフライベルクの鉱山には、八歳の子供から七十二歳の老人までが働いており、とほしい給料のために多くの者が副業を余儀なくされていた。⁽⁵³⁾決して「わずかな給料」に自足できる状態ではなかったのである。

ノヴァーリスは、このような現実とは異なる象徴としての意味を、彼の「鉱山」に付与した。第一に、「坑夫」は大地の内部を営為の対象とするゆえに、自然の生成の洞察者である。第二に、「坑夫」はノヴァーリスの理想の時代、まだ「調和」(総合)が保たれていたあの過去(中世)の象徴である。

第五章のそここちりばめられた、坑夫特有の言葉(「⁽⁵⁴⁾無事で」Glückaufなど)や独特の服装描写や坑夫の歌などが、「詩化」され、「ロマン化」された「鉱山」の意味を際立たせている。⁽⁵⁴⁾ノヴァーリスはある断章で、「学問的な、

地質学的な鉱山——美しい鉱山もあるのだろうか？」⁽⁵⁵⁾と言った。この「学問的な、地質学的な鉱山」は、ノヴァーリスがフライベルクや職業の中で学んだ「学問の対象としての鉱山」である。そして「美しい鉱山」とは、もっと高次の「ロマン化」された鉱山を意味するものと思われる。それはノヴァーリスの作品の中で実現されている。内部と外部の理想的な調和の状態を「美しい」と考えたノヴァーリスは、この境地にいたるプロセスを「詩化する」poetisierenと呼んでいる。その精華が「鉱山」に結晶している。ノヴァーリスはある断章でこう言った。

「どんな学問もポエジーになる——それが哲学になったあとでは。」⁽⁵⁶⁾

「学問的な鉱山」が「美しい鉱山」(ポエジー)へと昇華するのだとするならば、ノヴァーリスの「鉱山」において、「学問がポエジー」になっているのである。

註

- (1) Heilfurth, Gerhard: Der Bergbau und seine Kultur. Eine Welt zwischen Dunkel und Licht. Zürich & Freiburg im Breisgau (Atlantis) 1981, S. 141 ff.
- (2) Dürler, Josef: Die Bedeutung des Bergbaus bei Goethe und in der deutschen Romantik. Frauenfeld/Leipzig 1936.
- (3) Novalis: Schriften. Stuttgart (Kohlhammer). Abgek. N. S. Bd. 4 S. 266.
- (4) Olshausen, Waldemar: Friedrich von Hardenbergs Beziehungen zur Naturwissenschaft seiner Zeit. Leipzig 1905. Hofmann, Karl: Der Dichter Novalis in Freiberg. In: Mitteilungen des Freiburger Altertumsvereins. Heft 57. Freiberg 1927. Samuel, Richard: Der berufliche Werdegang Friedrich von Hardenbergs. In: Romantische Forschungen. Halle 1929. Dürler, Josef: a. a. O. Wagner, L. Elizabeth: The Scientific Interest of Friedrich von Hardenberg. Michigan 1937. Hermann, Walther: Bergbau und Kultur. In: Freiburger Forschungshfte. D2. Berlin 1953. Schulz, Gerhard: Die Berufsaufbahn Friedrich von Hardenbergs (Novalis). In: Novalis. Darmstadt

1970, u. s. w.

- (5) Pledge, H. T.: *Science since 1500*. Gloucester, Mass. 1969, S. 112.
- (6) N. S. Bd. 2 S. 490.
- (7) N. S. Bd. 4 S. 541 f.
- (8) N. S. Bd. 4 S. 163.
- (9) N. S. Bd. 4 S. 188.
- (10) 柴田陽弘『ハタチの神』(以文社)一九七五年。
- (11) N. S. Bd. 4 S. 171.
- (12) N. S. Bd. 4 S. 214 f.
- (13) N. S. Bd. 4 S. 29 ff.
- (14) Schulz, Gerhard: a. a. O. S. 295 ff.
- (15) Vgl. Anm. (2) u. (4). Freiburger Forschungshfte. D44 (1963), D21 (1957), D50 (1965), D68(1970), D14(1960), D11 (1955), u. s. w.
- (16) Schiffner, C.: *Aus dem Leben alter Freiburger Bergstudenten*. Freiberg 1935~1971, 4 Bde.
- (17) Baumgärtel, Hans: *Vom Bergbüchlein zur Bergakademie*. Leipzig 1965.
Schulz, Gerhard: a. a. O. S. 302 ff.
- (18) Baumgärtel, Hans: a. a. O. S. 135 ff.
- (19) Schmid, H. D.: *Friedrich von Hardenberg (Novalis) und Abraham Gottlob Werner*. Diss. Tübingen 1951.
- (20) N. S. Bd. 3 S. 280.
- (21) N. S. Bd. 3 S. 700.
- (22) N. S. Bd. 4 S. 275.
- (23) N. S. Bd. 4 S. 258 ff.
- (24) N. S. Bd. 4 S. 287.

- (25) Steffens, Henrik: Was ich erlebte. Breslau 1841 Bd. 4 S. 210 f.
- (26) Frisch, S. G.: Lebensbeschreibung A. G. Werners. Leipzig 1825.
Beck, R.: A. G. Werner. In: Jahrbuch für das Berg- und Hüttenwesen. Jg. 91. Freiberg 1917.
- (27) Bingle, H.: A. G. Werner und seine Theorie der Gebirgsbildung. Diss. Marburg 1933. Schmid, H. D.: a. a. O.
Baumgärtel, Hans: a. a. O. S. 134 ff.
- (28) ヴォルナーのいう「化石」が、今日のような狭義の化石ではなく、「独立の機械的な、自然の物体」であって、「地球を構成し、地表の中、ならし地表面に見い出されるもの」を意味していたことは注意を要する。したがって「化石」とは、あらゆる岩石や金属を含み、いわゆる「液体化石」としての水銀や石油もこれに属する。
Frisch, S. G.: a. a. O. S. 53.
- (29) N. S. Bd. 3 S. 340 Nr. 475, S. 359 Nr. 534.
- (30) 柴田陽弘「ノヴァーリスと教学」(『ドイツ文学』六三号) 一九七九年。「総合としてのカオス——ノヴァーリスのなかの哲学者——」(『理想』八月号) 一九七五年。
- (31) N. S. Bd. 3 S. 279.
- (32) N. S. Bd. 3 S. 363.
- (33) N. S. Bd. 3 S. 641.
- (34) N. S. Bd. 3 Nr. 580, Nr. 607, Nr. 609, Nr. 611, Nr. 628.
- (35) N. S. Bd. 3 S. 367 Nr. 580.
- (36) N. S. Bd. 2 S. 542.
- (37) N. S. Bd. 2 S. 159.
- (38) N. S. Bd. 3 S. 138 ff.
- (39) N. S. Bd. 3 S. 139.
- (40) N. S. Bd. 3 S. 141.
- (41) Schulz, Gerhard: a. a. O. S. 315 ff.

- (42) N. S. Bd. 3 S. 773 ff.
- (43) N. S. Bd. 4 S. 559.
- (44) N. S. Bd. 3 S. 368 Nr. 586.
- (45) N. S. Bd. 3 S. 625 Nr. 441.
- (46) N. S. Bd. 3 S. 317 Nr. 407.
- (47) Playfair, J.: Illustrations of the Huttonian Theory of the Earth. New York 1964.
- (48) N. S. Bd. 3 S. 83.
- (49) N. S. Bd. 3 S. 35.
- (50) N. S. Bd. 3 S. 460 Nr. 1026.
- (51) N. S. Bd. 3 S. 577 Nr. 175.
- (52) N. S. Bd. 1 S. 239 ff. Vgl. Schulz, Gerhard: *Novalis und der Bergbau*. In: *Freiberger Forschungshefte*. D11. Berlin 1955 S. 242 ff.
- (53) *Bergbau und Bergleute*. In: *Freiberger Forschungshefte*. D11. Berlin 1955, S. 168 ff.
- (54) Haslinger, Josef: *Die Ästhetik des Novalis*. Hain 1981, S. 156 ff.
- (55) N. S. Bd. 2 S. 543.
- (56) N. S. Bd. 3 S. 396.